

拝啓 めぐろシティカレッジ 受講者の皆様

コロナは一向に収まる気配を見せません。ファクターX をめぐり、ネアンデルタール人の遺伝子を持つ人種に、重症化に陥る傾向が強いという説が『ネーチャー』に報告されました。現代人が生まれるはるか以前から、この地球上で新たな宿主をもとめてさまよい迷っていたウイルスですから、人間から立ち去るには、かなりの時間を必要とするかもしれません。このウイルスが他の宿主を求め立ち去る、あるいは治療法の確立、さらには徹底した検査体制がしかれ、我々の安全が確保されることを期待しています。来年度には直接お目にかかって講義ができることを願っております。本日、エッセイ No. 4をお送りいたします。ご高覧いただければ幸いです。

敬具

令和2年10月

めぐろシティカレッジ カリキュラム委員長

山崎 憲治

めぐろシティカレッジ エッセイ No. 4(令和2年10月発行)

「人はひとなか」による復興

山崎 憲治 元岩手大学教授

1. 重茂半島

本州の東端はどこですか。美空ひばりが歌った「塩屋の岬」ですか。東端は岩手県の「鮠（トド）ヶ崎」です。宮古市から車で1時間、姉吉集落に着きます。そこから徒歩1時間余り海岸段丘の縁につけられた小径を歩いて灯台がある岬「鮠ヶ崎」にたどり着きます。この岬を含む半島全体を重茂（おもえ）半島といい、鮠ヶ崎のある南側の突出部の付け根に重茂集落があります。

コロナ禍が収束した段階で、宿泊巡検を来年度実施しようと企画しております。その対象地が三陸沿岸です。2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。めぐろシティカレッジでは2013年に被災地への巡検をおこないましたが、今回は前回とほぼ同様のコースを通り、それぞれの地域の復興状況を知り、そこから日本を考えなおしてみようとする企画です。三陸の海の基礎情報をお伝えしようと思い、このエッセイを書きました。このエッセイは、『東日本大震災と

＜自立・支援＞の生活記録』六花出版（2020 年 7 月）に載せた同名の論文の一部を要約・加筆したものです。

この半島はリアス式海岸の一部ですが、半島自体も複雑な入り江と岬が入り組む地形で構成され、入り江ごとに小さな漁村が生まれています。姉吉集落もその一つで、「此処より下に家を建てるな」の石碑が 1933 年の津波の波高最高到達地点に置かれています。この戒めを姉吉集落は守ることで、今回の津波では集落から一軒の流失家屋を出さなかったという例外的な集落です。それ以外の海岸部の集落は巨大な津波によって、全てを破壊・流されてしまいました。半島の大半が広葉樹に覆われており、入り江全てに小河川の河口が見られます。そこには汽水域が生まれ、海の豊かさを確認できる魚場が生まれています。最も多くのプランクトンが生育する海域は太平洋の真ん中ではなく、これらの汽水域です。山から注ぎ込む真水と海水が入り混じる、しかもその真水は広葉樹林の落葉がつくった土壌の中を流下して供給されますから、なおさら、植物プランクトンの成長に必須なフルボサン鉄を含んでいます。畠山重篤さんの『森は海の恋人』（2006）『鉄が地球温暖化を防ぐ』（2008）や『牡蠣礼讃』（2014）に詳しく記されています。宿泊巡検では畠山さんの養殖所も訪ねご本人から直接の講義を受講できる予定にしています。畠山さんは漁師であると同時に京都大学教授でもあります。海岸に迫る広葉樹林帯は「魚つき保安林」として保護対象になっている林地です。小さな入り江一つひとつに漁港を持つ漁業集落があり、半島全体の漁村と漁業を漁業区として維持管理しているのが重茂漁業協同組合です。組合事務所は海岸段丘の上に鉄筋 3 階建の建物で多くの職員が働いています。また、診療所やガソリンスタンド、物品販売所、そして金融機関も設けられ、この半島の行政・流通の拠点としての役割を果たしています。驚くことに、段丘の上には、水産物加工工場、冷凍倉庫が置かれています。これらの施設は津波を免れました。倉庫や冷蔵庫にあった海産物が震災直後に多くの現金をこの村にもたらす糧の一つになりました。

物産展などで、重茂の「焼きウニ」の購入を勧めます。高い価格にびっくりしますが、味と分量には大感激するはずです。買ってよかった！と声が出るはずで。しかし、東京ではなかなか手に入らないのが実際です。

2. 漁業センサスのデータから見えるもの

漁業を見る際、最も確実なデータは漁業センサスです。5 年ごとに調査され、日本の漁業の方向を定める基礎資料を提供しています。漁村（漁業区）ごとのデータが得られます。2013 年の漁家数は、岩手県 3365、宮城県 2311、福島県 14 です。2008 年と比較するとそれぞれ 63.3%、57.6%、1.9%であり、大幅に減少し

ていますが、福島県は原発被害により壊滅状態が続いていることがわかります。2008 年のデータで、岩手県は、漁家数が多い漁業区の割合が宮城県と比較すると多く見られます。宮城県は漁家数が少ない漁業区が多数存在する特色を示します。営む主な漁業の特色に、岩手県では採藻、採貝が、しかも漁船を持たずに経営するものが主である地区は 11.9%を占めています。どのような漁業なのでしょう。アワビ、コンブ、ウニの採集漁業です。「アマちゃん」の世界。稚貝を放流するほか、アクアラングをつけないでこれらの水産物を獲得する。口開け（解禁日）を厳密に守る、漁法や漁期を定めることで、漁業資源の根絶やしを防ぐ知恵が組合の自主管理の下でとられています。一方、所得の高い漁業に、養殖漁業があります。波の静かな入り江をもつ集落では、カキとホタテ、外洋に面する海を持つ集落ではコンブとワカメの養殖が行われています。岩手県の山田以南がカキ、ホタテ養殖地域になります。カキの種付けはホタテの貝につけるため、この二つの海産物は同じ養殖所で生産されます。東京で冷凍ものでないホタテは、大半が宮城産だと思います。ワカメは本来、暖流の産物。コンブは寒流育ち。ところが岩手県北部までは対馬暖流が津軽海峡を經由して南に沿岸を下ってくる。一方、北東方向から千島寒流が流れ入る。沿岸で二つの海流がぶつかる、極めて立地条件の良い地域になっています。一本の養殖ロープで上段にワカメが、下段にコンブの養殖が可能となります。これも極めて豊かな海を利用する形態です。

日本の漁業は、就業者の高齢化と後継者不足に悩んでいます。岩手、宮城の漁業もこの問題に直面していました。そこを震災・津波が襲いました。復興政策では、この問題を施設復旧と抱き合わせではかろうとしました。しかし、岩手県と宮城県では政策に明確な違いが見られました。宮城県では「選択と集中」方式がとられ、拠点港への施設整備、高齢漁業者の廃業を図り、漁業権に民間企業が参入できる道が開かれました。岩手県は全ての港、小さい漁村の港まで復旧する方策が展開されました。恐らく読者の多くは、「選択と集中」で高齢者が細々と展開する漁家の廃業と積極的に投資を考えることで後継者が広い漁場を確保できる展開が期待されるものと考えるに違いありません。ところが、後継者が育ち、高齢化が阻止されたのは、岩手県のほうがはるかに多いのです。一つひとつの漁業区の高齢化率と後継者が育った率を比較すると、この結果が得られます。民間資本の導入が図られた漁区では高齢化がすすみ後継者が育っていないことも明らかになっています。沿岸漁業は漁業者の共同作業とそのなかでの適切な競争のもとで展開するし、それは自主的に進めなくてはうまく結果が出ないことが見えてきました。

3. 復興の姿

壊滅的打撃を受けたが、急速に生産を復活させ、後継者を確立した漁業組合の代表が重茂漁業協同組合です。津波から1ヵ月後の4月7日、組合員総会を青空のもとで開いています。伊藤組合長は、①これから1年水揚げは組合でプールして全組合員に平等に配分する。②当面中古のサッパ船（写真参照）を組合が用意しそれを2世帯あるいは3世帯で共同利用する。③養殖施設の共同利用をすすめるが、資金は組合と県や国の補助金でまかなう。④新規サッパ船は保険金で造船するが、それに必要な資金は組合が肩代わり、保険金は当面各漁業者に回し（30万円）、全漁家に舟が行き渡るまでこの事業を続ける。施設の復旧、船が全戸にいきわたってから、本格的「競争」を再開する。この方針が全員協議会で確立し、その後、犠牲者の慰霊祭が行われています。その間、組合幹部は現金を懐に、青森、秋田、山形の漁業集落を回り中古サッパ船を買い付けています。支援する生協からは、大型漁船の寄付もあり、復興は共同の力で急ピッチに進みました。文字どおり「人はひとなか」での復興でした。この言葉は伊藤組合長（当時）から聞き取り調査で直接耳にした言葉でした。

重茂にはこの村には1軒の「飲み屋」もありません。酒を楽しむなら、各家庭で、仲間の家で、ということになります。新たに赴任した中学・小学校の校長も官舎に大きな客間があり、同僚や地域の集まりはそこで行われるのが常ということを知ります。そして、その環境に慣れていきます。なにしろ、酒の肴はお客が持ち寄ってくるのですから。重茂の漁業生産に婦人の役割は欠かせない位置を占めています（過重労働という面もありますが）。サッパ船の操舵から、塩蔵ワカメの加工（塩加減によって品質・価格が左右される）、特産品である焼きウニの生産・加工、いずれも婦人が担っています。さらに、海を保全するため、石鹼の使用を徹底しており、香典返しは海を汚さない石鹼に決まっています。反原発の全国集会が日比谷公園で開かれた時、この組合の婦人部は集団で黄色い作業カッパを着て壇上に登場、その意思と団結力の強さを訴えました。女性の力が組合の中で発揮されていることを感じました。ですから、全国からこの組合の復興のあり方・復興モデルに注目が集まりました。

日本は、食糧、エネルギー、ケアの”安心度“が極めて低い国になってしまいました。1980年代は水産物の自給率は95%を越えていました。2013年にはその値は54.6%にまで下がっています。しかし、幾つかの地域ではマイナスをプラスに転化して、地域の強みにした例は少なくありません。そこに復興の鍵があるように思えます。足元にある豊かさを放棄し、安易に外部に依存してしまう。その付けは、確実に不安と危機をもたらしていきました。世界でこれほど海に恵まれた国はないにもかかわらず、漁業という1次産業は「遅れた産業」というイメ

ージを定着させています。魚価の不安定は、安定した産業とはなりにくい環境を生んでいます。一方で、異常なグルメ番組がメディアから流れてきます。地産地消や自給率という「食」の基本的課題が忘れがちになるのではと心配になります。復興が働く現場の「生きがい」もたらず、そこに復興の意義があるし、災害に強い国土が形成されるのだと思います。コンクリートの堤防が唯一の復興事業ではないはずです。

被災地に学ぶこと、現地に立って、復興の実際を知ること、来年企画している「宿泊巡検」が日本の可能性を示してくれるものにつながるのではないかと思います。期待を込めて、重茂の報告をさせていただきました。



海岸段丘上に広がる豊かな広葉樹の森。森が海の豊かさをつくる。
森と海が一体となって地域の豊かさを生んでいる。



一艘のサッパ船に2人、もしくは3人の漁師がのり、共同作業でコンブを収穫。その所得は、組合がプールし、組合員が均等に分け、被災の危機を乗り越えた。乗り越える中に共同で作業する、漁業協同組合の活動を認識。それが生きがい・地域への誇りと自信につながっていく